

盛衰通記

四十四卷

姫

戦記

内閣文庫		
五	三	和
一	四	書
函	七	類
七	〇	
架	九	
	冊	
	號	

(世系)

内閣文庫	
番號	和 34709
冊數	33 (30)
函號	151 60

共卅三



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



盛衰通紀卷第四十一

目錄

秀光口誕生付朝鮮在陳將卒大略物語

秀吉口素浪心不快付秀次自害男女下人誅

兼石川五右衛門

此相傳御到若于伏見

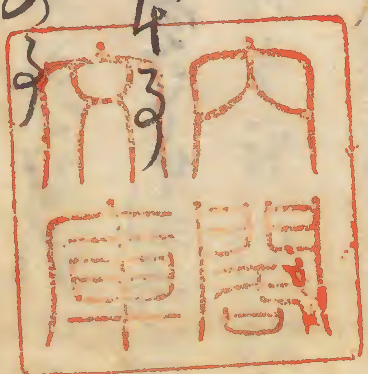
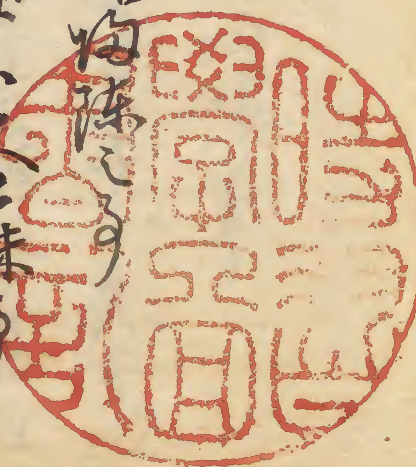
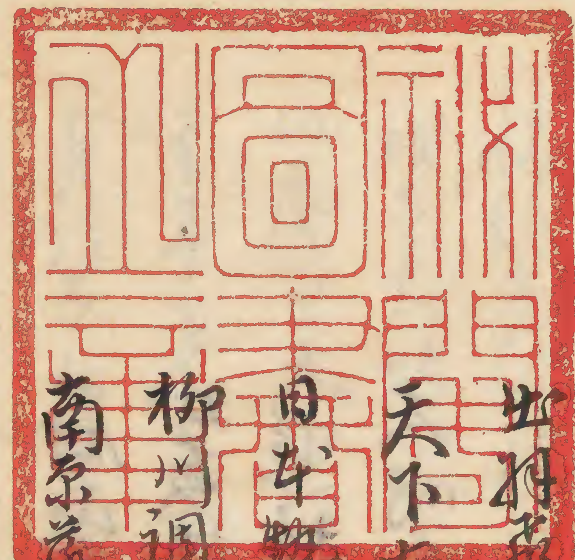
天下大地震付朝鮮大明與使來日本

日本勢再渡海朝鮮付朝鮮必軍

柳川親佐統朝鮮付小西退退元均元閑山

南京高城付合列城之敗走

朝鮮相解生与黒田長政合戦付星列軍



淺井宗戸大田本彦陽軍しる

蔚山合戦付礪山城責しる

加友清正入蔚山付揚務田蔚山

并揚務敷しる

大明勢欲責順天由日本波好詳定しる

以上

盛衰通紀卷第四十一

秀頼の誕生付朝鮮立陣將卒大略均陣事

文禄二年十一月尚閑白秀頼より名古屋書とせし秀頼の

乃若君誕生此事と若ら此是去淺井長政の息女

淀殿に服し若君の由名とハフヒロヒ於捨と申りり秀頼の太

悦ひ多し徳川家前田を招て朝鮮の事能く計し給へ

我々大坂より一子に對面せんといふお詔傳しきて後弄璋

の慶を天下に施しり是より秀頼を廢立の心付給り

其年も昔文禄二年十二月拾君え服あり多秀頼と号に

秀頼を心付給り此更に遜讓乃色見しあり秀頼の

行末秀頼の事大坂に於て天下此政事を沙汰させんと

あひ討まふに城州小懐伏見よあつた隠居の爲に城を
築むに糸目とよ朝鮮を陣の法將北中よ死を致し
大將ハ丹波が將豊臣の秀勝長谷川有太郎秀一東江信長
加友を以てお也中川秀政を討死しりりそ外戦死病死
勝りかろふ一ううそ秀吉は朝鮮を陣の二匹(書)をせし
作をけるを釜山海の法城強固の将卒ハ先くうふる
あうまそ外の将卒をことくを御給有しと定らま
あり依る名古臣を陣釜山海の将卒信をぬくみく
伏見の城(あ)にありりり望二月を秀吉は吉野の死見
とく大坂を奪し給ふそ比北苑の中紹巴由巴昌叱亦堀ふ
同三月(言)野山(後)一山の僧侶八子余人呼出し糧米
を給たり是は母云大政訓の遺言とや同七月廿二日よハ
東寺の塔とを築ふあり是皆冥福の爲ことや

今度朝鮮の法將大略歸朝のころハ玄十日内有死難者
如安更経略孫權(首)大略(新)司馬石星(肉)友を
討く(食)難(中)よハ中よハ入の後石星
と和年(同)長久(後)しそ和調(ひ)り給ふ後(は)河維(教)ハ
釜山海(東)り和親(の)事と中(故)に日本(の)法將(大)中
御給(し)る(ま)も小西(本)を(控)強(り)あり

秀吉秀次(不)使(付)秀次(自)害(男)女(下)人(は)殊(る)事
并(石)川(五)右(馬)の(事)

又(福)田(守)の(ま)の(は)ち(秀)吉(は)秀(次)を(殺)す(成)ま(り)秀(次)の

急送戒を城に上りて鉄炮を放ち御人と打あるし亦と
一經に上りて後秀次謀叛の事一澄せざるも此ありて秀吉の
聞多し居りて使を立て世に浮沈對面して不とんと
なる事伏見へありまると信せざる秀次程豫しき事
亦臣吉田修理の事とせしめしむる秀次何と云ふ事
吉田の言と不利して伏見へ趣あり秀吉の城中へ今
迄に未下大膽の爲めに秀吉より使を以て謀叛
の事あり旨命とせしむる事多し言押山へ上りしと
何事しと秀次やうて利程し伏見を出し言押山へ趣あり
後若は秀吉の此命あり騎馬式十人歩卒十人の介あり禁
りて武蔵守の侍生田右京藤部清隆と津田雅永助山田主計
お田主水不殿万代雜賀虎丸山田三十郎山本主殿志水若
三郎以下位より又秀次の男女此子式人兼電電の妾侍女三十
餘人ともめて種永法皇孫昌の趣に趣しむる又丹波守山
城へ福しり志はしむる種永福永右衛門正則池田伊藤と
福永右馬助之子余をよて言野山へとせ向ひ秀次の居るふ
清山寺を囲みしと秀次いりて藤部清隆と以てても
自害の覚悟なりとてい根籍といはせられし使を
退りしと後秀次自害せんとし終ふ時山本主殿十八歳より
清山寺人とて腹を切る續て山田三十郎十九歳不破万代十歳
以下玄隆木自害せしと終ひ秀次自殺せし時二十八歳なり
藤部清隆も介錯し切腹しし使彼首をとり伏見へ

ゆつてかくと云りて其後秀次の子黨と云一木村常隆分
白江備後守熊谷大膳亮栗田本三助日比野守山口
少云丸毛弟心以下とく多伏誅せしふ秀次の子黨と云
一柳右を好望ハ家康ハ一柳右を好望ハ一柳右を好望ハ
伊友加賀守ハ新島康元女正を好望ハ吉田清右衛門ハ新島康元
ハ赤松信をハ依竹右衛門義宣ハ新島康元をハ小島川
隆系に新島野但馬共康とハ中村武部ハ新島康元又
本下大膳荒木安志延秀院玄朔法眼信也等とハ秀次の子
ら此年死す後安志玄朔信也三人を赦免せしりて其後ハ
大畧あらされり秀次の自害ハ文禄四年七月十五日の事
成り同日ハ秀次の妾室兼二人男女共子とも侍女三十

余人無山の獄より出でて之を河原と云く川出ハ徳義院玄以
増田長盛石田三成木捨使しりて皆首と刎られり秀次ハ
二子と申ハ山口少云ハ娘腹ハ女子一人産ハ又小畑松梅院ハ
娘腹ハ男子一人あり此等と娘とて女中一人も共く此首
を斬りて首と河原に埋て畜生塚と名付る所古今に
お代末守の仕立しりり秀次を山き甥なりて其女を
にとりて其母にききに秀次を山き甥なりて其女を
其母又石川五右衛門といふものあり盗賊共棟梁にと切
強盗と業として往來の人を悩ハ或は殺付ハ財宝を
奪ふ秀次ハ聞きて徳義院玄以ハ知ハ遂ハ石川を
かめとりて其母に同類のよの二十人計ハ三條河原に

引出—おとくを金よ入事息殺—あり

出羽飛脚おとく伏見事

文祿四年改元あり慶長元年となる
お羽北國より飛脚あり
中より、尚國の住人秋田城より秋田利与一と申若と城を海
—不和となり去年八月廿八日初と合戦をせし同九月七日
秋田城より勝を率—同廿二日の粒足川と申所より秋田利
親以滝利を案内者お俄と申討—秋田城より打ま^ありて後
又城より廿二日—打かて戦ひ又城より打まけ—秋田利与負取
まゝ十月十三日滝利は館内獨孤城—押寄之の門を破—に滝利
は巨滝利槍を射り建呂七を射りおよく防く及て此軍に毎度
秋田利与を—ある口惜もい同十月十五日の軍に滝利敗れ

—お人野呂をた馬玉園を—無討死し由連は滝利を
元雅を玄蕃元おこと傳う—戦ひて山田茂隆と申下
引取—陣を張る秋田勝せお来りて大に敗れ此軍を多く
—とて秋田、お人境田をた馬と滝利方建呂七を一番勝
合戦—と後軍あり—慶長元年二月十六日秋田又出羽國
山田—お事戦ひを傳—これに滝利も獨孤城よりおとく志
合戦—の秋田軍を—これに滝利も討之—しり来は
与力半におきて國中乱る—と傳中告る者若くは双方
軍と名山をお人たに誅せん目代—おとくや—後軍ハ
や—あり

天下大地震付朝鮮大明使來日本事

天文長元年七月十二日大地震あり、大にけて水涌出るも、川
のほとり、京大坂伏見の民家大屋巨宅、民の家、かくみき
破家神社仏閣、破壊あり、千たり、五重三重の塔多く、い
をり

此時秀吉、大佛殿へ、つる國、安平の爲、大佛を安
きに其益あり、とく、らよて射まひ、とらやけ、況ふ審し

その後秀吉、人丈と信徳國へ、を、若光寺仏像を京へ、五重
らふ、い像を大佛殿へ、入、む、け、つ、を、後、年、強、く、若光寺へ、う、
さ、進、り、り、を、後、あ、つ、に、今、の、大佛の像を、移、立、て、大佛殿に、納
られ、り、又、玄法の大地震、秀吉、若光寺に、寵、を、け、女房を、多く、
壓、う、つ、進、死、り、り、を、外、奴婢の女も、多く、う、り、こ、ら、つ、進、相、多、の

給仕さへ、あ、く、で、俄、よ、あ、川、む、系、にも、ま、人、あ、く、て、京、伏、見、大、坂
堺、北、極、女、も、と、教、百、人、召、集、め、侍、女、と、て、出、仕、り、り、又、畿、内、京
關、東、法、國、よ、長、四、寸、の、毛、を、ゆ、つ、此、地、に、積、り、つ、お、お、の、と、
さ、進、も、お、と、形、不、事、し、な、り、り、り

玄月とに大明朝鮮も長陣をや倦らるん志きりに和を乞ふ
去、六、日、よ、朝鮮、北、使、志、極、擊、將、軍、大、明、の、使、志、沉、維、教、釜、山
海、を、祭、一、日、布、一、紙、り、り、以、時、ま、て、加、藤、信、正、小、西、長、ホ、を、於
釜、山、海、よ、み、り、り、あ、使、と、在、よ、日、布、一、紙、る、御、八、月、十、句、に、成、て
極、擊、將、軍、方、亭、系、沉、維、教、伏、見、の、城、へ、お、召、を、り、秀、吉、若、光、
柳、川、豊、お、お、調、信、を、使、と、て、朝鮮、の、二、王、子、れ、内、一、人、召、り、て
不、謝、し、て、使、志、を、ひ、く、中、宗、を、禮、な、り、と、い、り、り、て、あ、使、に

阿比連より来りぬ使をねくふおれ長よ便りてい詔くよ
るあにく對面をいきよ極り九月二日は使をよ伏見
城よふけ時秀吉の花園の山莊あり兼光靈三永哲を
臣制して大明の書のよませられり以時行長ひそに
兼光に中りりお秀吉の詔令の義を聞給りおふらん
於くハ文字辭を寄りてよこすといふ兼光文にふ字
者のまにふこしり秀吉の太にいうて大声して曰く明帝
我を封して日本國王とせしは是の條の志を以て武略を以て
既よ日本國王しり何れ明王の力をうらん小西の中せしハ太
國王とせんといひぬ軍をうりしり今け書お遠くは長
く偽りそ身日本に有るる志を明へ毎にふ事と衆懼る

是連に長と呼べし長う首を切め其心せんとして行長
と召し行長素顔を呵れそ声雷れしり行長中ハ我
一人せしる如しあはれにせむの旨と受て変れそ詫あり
とく極道の書と出りしれハ秀吉の憤をかきりり使
けていをも又ふおれそ退めしそ後秀吉の加藤清正石田
三成増田も盛大に言吉隆おと召て大明朝鮮の和睦調
再ハ大言を以て朝鮮を亡さんとあはし使をも首と別ん
とかもふなりと乃給ふ兼光靈三永哲お凍りは和漢古
今在小使を殺し法おし使者をふるしてを敵みり
軍事を誇し和睦とこのふ家媒ありと凍りれハ使ハ
死をよぬりまあり秀吉の加藤清正西國の詔將を

百何つの朝鮮へ發是れ即ち定めの軍事評議せり計
るを大明朝鮮の支使歸國して告ぐる朝鮮王李
取恐まゝ重て援を大明へ乞ひり

日本勢再渡海朝鮮甘朝鮮國軍の事

慶長二年小西行長を肥後國に居候して航海の事を
伺しあり是秀吉の念怒を恐まて一別もとやぐ渡海
せんといひし故に後二月に陳の船あれども正月にか
陣しあり加藤清正も行長を先づ祀生う難と著りすと恐
まゝ是も朝鮮へ渡海せりを備を八咫なり清正之陣と
して舟を奈し朝鮮より竹崎此壘に入横張し陣し忽に
梁山の城をせめ落し西生浦より舟又小西を乞ふを釜山
海のおよりをて等毛といふ事にして旧營を改筑茶中納言
秀新と城主とし又法城を所としかまゝ久留の計をありり
日本の法將渡海を信し聞多事取も亦去年の敗意あり
軍よりあり多后妃王子とたけし海別へ逃去法将も一戦
の志あり東境より逃れ大明へ意を告多事取の意をひ
りしと一日日本勢十二万餘人皆朝鮮へ入りし朝鮮の軍をも
戦射數百艘とその一多防人とそをとりありありは舟に
向ひ一日日本勢釜山海より休息せしに翌日朝鮮の普松在
熊浦此浦は多くと浮くより巨をみくにより船中の
法將となり毛利豊前あり陣し一評議あり是より九鬼大
隅守有堂言虎亦りハ明もあつたものよ和を押し出

當船の極子を見事大船とこそせしめし大筒石火矢に
打ちくめ舟を乗らんといふは是に同一なる事か加
左馬助ハ唐船ノ敵ト爲ル船ハいづれも比方より大船あり
あはるる大筒石火矢を打ちくめしかの浦を逃去し
實に船軍とせんとの事ありは云士と申すにのせて敵を
あらいよつくとを退し敵の虚をえり結末を見しは
せめんよ青船と云取すやうくしといふは一死返す
多しは皆中あして軍せば透るるは^喜の事なり名さ
せん必定ありとあひくものふ人か服取中書安治云るハ
西ノ所存と申すといひあれハ一死もにかはる評決ハ
吾氣色よ見しは赤船中あしるハ階ハ向日日本

勝はるや二ヶ所あくる名せしは船を此親ハ未言名なり
秀吉の後陣もいづくはは大筒石火矢めくいく度も
敵を逃ししは^喜の勝算なりは^喜ハ軍きいづくやあは
け左馬助ハかく存ありといふは堂々虎服取中書三
乃中あは赤船といひぬん安大くしは船軍と仕損る
ものありは^喜の軍もえりくおかりしと申すは三なり
とて^喜に同じる氣色し赤船といづくは^喜の評決ハ敵
船と逃れんは敵を落てけありハ唐船ましくも逃れん
や敵も勇るえありけりめ智謀を何果しハ名謀をうま日本
幾代傳り入てうんとは^喜も難計は是れ事と是れ
をせんハ船隊の云は軍中事ハ海ノ敵ハ石火矢

よ忠告して順風は後初の子悔するとも甲斐なるらん敵兵と
戦ひく手ありある人ばともあま軍門よハ王命と不中と
いふも其部お申んて有事に戦んとハせくおどろき事
逐さんとす家活御おハ此左馬助ハ同心被りといひられハ
服坂安治守とつめて誰の敵に手こりあるも此ありや
と云を中とのふと既打もくハさんと江家と每人を
抱留ハあれハ左馬助ハ笑て人ろもハ被りハ此ハ安
う連とこそ新穂よもて被りあり服坂もいひやこり有利
豊前守は幸ふの亭をあれハ軍の損益の評決ハ定らる
事ハ是子付ても秀吉の寵愛ハ將を多く持より
實勢ハ海りても君の忠告を命よりけて評決ハ大切
あり候やいさく一酒一瓶ハ酒宴ハ無と信ハ船軍の祝
せんと重役おハ左馬助と中務とさ不快と和ありり
その後在中より船軍の評定と九鬼大隅を中せといひ
あまハ九鬼ハ不敵を明新味方ハ説けり唐船二艘ハ漕
おさせ唐船の被り見く大船中船と用事ハ敵の變化
に強ハあん船とハ船中に出候ハ一ハ印ハ忠告あり候おれ
志う候ハ一といふに皆ハ後ハ船と一回して退出ハ希り
御船向ハ船と都ハ唐船ハ漕船ハ奴船系に任候よ出
味方此舟ともいれ漕船より番船と三百餘艘船戸口よ
うけある船二隻にあり山際よりいせふハ沖あり海に居て
半舟ハ此舟ハ見て中といふ服坂が舟ハ舟はハありてや

かまよてまーといはきま度せしよ船ちうく成てな馬助
大音揚ぐ水の方より二番目此大船とてふれと下知れハ
二艘の船は向ふ敵は小機と見えふ驚之番目の船は
敵音も向ふと見えく二百余艘の中より只一艘のさか
と向ふ是と見えく陣に振る青船もつもの岸を
傳ひし振る船もと其の形も成りてな馬助は四艘の
舟とまん舟は押流こまーつめ門は射れる舟車袖は
な馬助の船を幕楯船楯水も用ゑるこれひりくと
振られ討ちもれはありあり敵合み六るに成れは先
舟もとと打殺せと下知りてな馬助もあつる中船もも
士卒の少めよりも清炮を打もれは船もよきを敵は水

二三十人舟底も打落さる敵はよよりて水も楫とて
船底へ入る敵の大船も舟の自をとろい後ふも
波浪ようれてたふな馬助は船押はよくと下知れ
も情力を尽し味方の舟も船ととあつる嘉明が
舟人執佐舟打つとと敵の舟はけしと敵も切拂んと
二三度まで切りを流した馬助も打つと引くも敵船列を
系うはんとすふと執佐舟先打つ今見れ一番系ハ
佐舟と名系嘉明もあつるは系敵多くな馬助も打て
うはと嘉明船身にく力戦し舟人と切あつる河村権七
も舟あつるつるは時嘉明は親長加嘉忠嘉高女蔵成り
佐舟もよはいて敵舟に系つる海舟へ射落さ

去方長を清も同くあり是にけしと系なるに船中人
ありや板とよけて見れハ船底よりひきかきあはれり去方
長を清面もあつは津と合はつておくといへりハ去方
放し舟と合せし群るをみて切しあつてハ或うて
おろされ海へ入るあり水は助もく櫓を押し進め
まうりし内連とも助もものハ十分一とく首をとふ
個二部を傍敷と在る東助を清の中助店を其の印安若
拾ふ六人に高敵船二艘系れり去馬助ハ佐將の昔を
欺りりいり又は民とあつていふんとやあひん又敵船に
押向ひありう津うんとせしよ前明あなるとにつまひを
海中へ落し入るし袖を抱ておとりより敵兵と苦戦しつ
て船ともあつぬりり此時矢一つ来て前明の股にあつて
血を流す船とも不顧禍鳴信濃守勝茂はあつておれり
苦戦有功を感しりり取堂言虎服坂安治おも肉く先電
の心けめく船ともあつてやあれハ去馬助のかるそえて
唐船船けせし去船を系りそんと去前明よ先えて
一處にせしよせしるに敵はあつり銃砲火をといふはを
投入しハ忽破れて船中へも一付にせしやあつて去船
そ火を消るるほとに子負死人もまうりきり内連とも
腹破るる昔を昔船一艘系れりり軍を始しハ去虎安治の
勢なりりり去切されつていハ九鬼大隅守ら去船を
並てより炮烙火矢は用心して縄網を張られハ火矢を

海(あ)ら(ひ)入(る)敵(も)か(や)ち(り)と(や)推(し)ん(炮)煙(火)矢(に)
程(を)ひ(と)付(く)海(を)投(げ)あ(れ)繩(綱)引(く)て(海)中(へ)
落(こ)り(と)と(う)く(て)亦(た)と(く)炮(煙)打(く)た(き)船(を)多く
や(う)ま(て)り(船)と(り)ま(し)拒(む)れ(船)を(う)く(て)戦(ひ)智(恵)の
程(を)極(め)り(と)ま(し)跡(を)残(り)軍(兵)も(先)に(覚)束(を)き
に(漕)舟(も)り(た)馬(助)の(戦)と(見)く(三)舟(舟)と(始)と(し)ま
死(生)不(知)れ(あ)ら(ず)軍(兵)も(見)え(か)ま(し)一(人)の(言)名(に)
其(も)口(惜)い(そ)あ(く)と(押)し(進)も(打)首(級)も(む)う(ひ)く
も(り)け(り)き(り)か(く)ひ(免)く(う)ち(は)船(軍)既(に)敵(に)普(船)
も(に)あ(り)せ(ぬ)た(馬)助(は)船(を)引(も)と(し)味(方)の(舟)漕(通)舟
た(る)船(は)大(音)揚(ぐ)め(は)海(を)船(何)も(あ)れ(は)乗(捕)て(る)船
一(船)と(何)も(む)さ(し)と(敵)と(声)に(く)あ(り)の(船)も(あ)り
き(り)軍(兵)一(名)古(屋)中(に)送(り)あ(ら)に(敵)堂(言)虎(は)舟(軍)は(我
先(登)と(し)た(馬)助(は)言(虎)を(あ)り(て)佐(渡)舟(何)を(い)ふ(や)今
度(の)先(登)あ(り)と(我)船(に)誰(あ)ん(と)い(ふ)言(虎)笑(て)一(言)は
頗(る)人(よ)う(言)虎(は)は(叶)ぬ(ま)し(志)願(い)う(り)て(既)に(勝)負(せん
と(は)ふ(と)庄(中)と(し)と(あ)ら(に)和(を)調(へ)り(大)將(軍)守(勢)
の(若)臣(戸)川(肥)後(守)か(り)と(有)り(と)は(争)論(を)ん(あ)ら(し)め(し)
お(れ)船(軍)の(り)秀(吉)を(い)ふ(あ)ら(に)た(馬)助(の)あ(り)も(軍)功(に
人(を)い)う(と)も(其)測(底)を(と)る(と)ま(し)と(志)願(一)人(は)感(状)給(り)
り

其(方)事(天)正(十)一(年)江(水)中(に)て(守)田(五)合(の)時(一)番(旗)を(流)く

所加増せし今度又朝鮮唐海に去る船數百艘の中へ
味多と云れ余入敵船を余取て勇誰の上に立ん
今度順天蔚山兩城よして引入旨者速刺此自に加藤法正
ホと見捨るべきに付て加刺せし旨涉感不淺者仍る代
官亦五萬石三万七千石加増せしむ本知捨万石の内を方
石の二割を役法候し中臆病者あり關所せしき國書に
加らるし令と重し志忠を尽しきものこし

九月日

秀吉書來下

加藤左馬助の

改申唐海北和軍も朝鮮方打負し六ヶ所を大明へ告
をり大明の法臣評決し日本の云再び記あるし司馬石覺
の罪なりと一回申しり石覺ゆつて大に驚き以維教衆
ありとてせめしをあるともこのまゝく石覺も維教も
穢言よ入ら連り朝鮮より援を乞ふとも大明も其言
志をく記し民の進士苦むて言よ其言も大明
もまゝみよ進り

柳川彌信統朝鮮付小西退元均九間山語

同年四月大明より數十万人來り朝鮮を救ふ同六月秀吉
少将柳川彌信を使りて朝鮮の法正一任をる日中北
兵もいり西生浦よ入るいふ敵地へ云と進む一軍
云多の付りとも勇戦を励さ必大功を建し一若又汝ホ
我言に及候汝等其子孫よかあるといし法正の

勢ひくも返軍中上り古を日大明此勢全無よるに誠
敵くくも加勢と臨んや柳川此方と中上の秀吉とい
て又中送りて云く往年我々一督のちるに晋別と屠り
今又何そ懼ん字在る多おに望寧晋別より全無よ向ひ毛利
輝元を晋別よりひそくに陽大丘を經て向金谷の方より
せめ撃ハ敵いしてあつらん清正も此長も明玄の事記を忍
ぶる志あはるあまきこあつとく志あり柳川又朝鮮へ
来りかくも中あはる清正も小西も必死とあひ定りるを後
河維敬をよる為獄舎よるから朝鮮の信惟政松雲を
辱といふ書を清正へ送りし中上りハ大明國此武將形珍と
いふも此七十万此兵に事朝鮮へ送く公ホ此こやに兵を
徹して可あらんと書り清正返すよ松雲我に送くゆま
明玄此七十万来候すとあはる益々朝鮮の
玄は懦弱ゆて我々よあはる海軍ふ叶我々鬱塞此故よ
何と進む心して軍に害あり今明玄の強きといふも我
てとくくうらあはるふ言我悦何れあはるにせんむ
来りる我々とあはるく久く清と返軍しりる河維敬
英明玄朝鮮人ホ是とすく大よ思進りる河維敬又信を
清正の老臣金谷より遣し和軍の事と中あはるとい
金谷又其金谷に返軍清正と同事しりる河維敬も力
及てあはるてり此年從二位美門筑前の子小川澄景
卒去り武將此達人軍の智識よて兵法の評識ハ人と

福^くの^まも^はい^あり^しに^卒去^せし^人皆^惜り^しに^{朝鮮}
の大將元均といふもの阿^し明^と名^とと^諷して^{釜山海}と^攻むと
し^小細^世多^とと^聞て^先中^の時^利あり^とて^逆う^せし^て元^均
水軍をうちせしむに^あひ^しむ^ぬ時^故元^均大^に敗^れし^逃失^り
あり^行長^し人^事困^し鴻^と責^りり^に一^陣破^て強^黨全^が
ぬ^習ひ^て是^も敗^れて^采山^鴻も^采れ^り依^し日^本
勢^の和^軍智^便より^けり^日本^和師^既に^光陽^豆和^津に
乱^入し^逆に^{朝鮮}孫^恩あり

南原城付全別城之敗走事

同年八月方南原城へ向ふ大子大將軍ハ宇花多を先陣ハ
小糸之介清津兼江將治賀家政長曾我部元親加藤嘉房
生駒正俊亦五千人加りめ多は副將軍毛利秀元を先陣を
清西へ其外黒田長政淺井幸長五千人中綱玄秀秋釜山海陸
山口玄蕃元伊左雅乐外南郡無名者二百八人餘人を具し毛利
秀元加藤清西亦と一軍に成り去と忠清乃へをむ此時敵
將橙標本元翼雲峯といふ所へ屯せし防戦をいしして
おちくを東境へ逃げ走ゆ又宇花多西へ南原の城を攻
んとし其時將ハ秀家一中心多は今夜の先陣圍り
にせんといふ秀家むことと圍を却りしに清津兼江と
加藤嘉房圍を破りて大子悦ぶ武人に軍を率へ全
別へ向ふ方に陳恩^{ナラ}裏といふもの南原を去くといふと去る
清津の向ふと守て逃るし清津兼江長下四百餘人

をむく南原と攻りありけ城を獲揚え李福男は人
明くさまよく防く既し四百せめりしはまともありき
討り斗へ秀敵下知てを老よせし城申候ん
云氣を承りけりとも小西見し備あまほのよ我を
招き急よをむて攻りしに城申をさしひと抜くし
たふれあまし同業して防んとに果し長忽南門を破り
城へ突入獲りし勝時をさしり一人の言名にあらま
守敵多増進か長多我部生弱敵多言虎木我り
そひをむ揚えを帳中よ有りとと詠えしはさ
不及盤礫は既足して逃れしあ手是とハ下觸と
叙すとのありしりハ危き命を助りりり李福男ハ
記合せ

アハタカ

劔をとり多戦ひし遂に討死しりり秀敵行を
し首を切りし子七百人生口も多しりり
をしりしより日ち一毎一秀吉ハ中をとりりり
後城をひとよ小西ハ武勇あれし
高りりあり又全別へ向ひし
攻りりきとをしりり被城を陳恩表ハ南原をす
りりしりり居城全別へ引入しりり南原居城
りりしりり木大よ記里全別へ攻りり
して四角八方へわけ去りり
若陳忠とすしりり陳恩表係よ
は時傳も加茂も羊穀を具とあ川めたくりり馬と
任實としりり城を控て逃走れ

宇部より方へ使をたせく全州を我を侍中中あれは古名
古原(江を)より又明將刑珍南東全別各城の陥をすて使を
明くえせ多陳忌表う増弱を解りり明帝大よいうり事
李耽を呵して日本より朝鮮を攻る事大明社多々取
る苦を解て度々援を遣はし命を預せし此程あり
あ一統也とも李耽并臣も軍と明兵に内河に戦ふ心
那一皆是李耽の誤なり罪せしんは首へくはといひ送る
一かハ李耽大よ忠進て朝鮮八道の去とさいそく一
大明の刑珍る中知は後ひ軍せんと交度りり今年八月
廿八日足利將軍源義昭は六十一歳よて薨御せしる靈陽
院是なり西海に流浪しうせまひあり

朝鮮の解生と黒田長政合戦并星州軍事

李耽は大明の呵責に忍進く八道の去救十万人元長を於
て同年九月金峯館に陣し又王城の致を固く副總を
解生を將とす多去と二手ふ分て稷山永源の各一を
日本勢代防く毛利は先陣に黒田長政勅しあまを防ん
とて誘うけしに解生日本勢を忍れく去をさげく城にあも
里て敵てふは戦秀えり向ふ知るに敵はる者なり長政
いふく去をすくめ先登して行而し途中に解生に遊
しり黒田は長栗山備後と後敵又去橋木王つうた五十騎
に解生を救ふ人と戦ひしに解生は勢がけ小堀かに由海に
色し成り時朝鮮の三大將を撃將軍揚登山牛伯英も

来りぬふ栗山後友と田備後等も又之患もあて忍ぶ
氣なく解生極難に登山伯英の四将と戦ふ長政はうた
えて此の先陣よりいさへあはれはくも味方此ともども
みゆふ二子人あく四将と戦ふ毛利の先陣も之を
戦ひつゝ八日相碁易して小け走海御も亦し李益春
劉過節亦の三太相又此ふ解生力とゆくおてう
又戦ふ長政いさへ敵の固を破り毛利以下法相敵乃
後よりをもと来れぬ解生を亦此法将もふ叶とやあひ
高し軍とく一も既日言一う八日不勝返すかあひ
是にう終日翌十月に朝鮮北將麻貴といふもの李如梅と
将して救方人筑紫上陸ぬ義を久留目友四郎秀包

南部無名あつちりた子星別谷城コウセンにとりよせて籠衣責ん
と中筑紫久留目南部亦星別をとおくをいふ李如梅梅に
おきて大に戦ひつゝ李如梅梅うち負て走海日中勢あは
しう城ハ攻めくいに之を来はくぬ先之と納めたり

漢地完戸大田木彦陽軍多

大町の将刑珍ハ鴨緑江を渡り遂に朝鮮王城にむりあり
ふ乃時清江を城と蔚山に築んとて亦長加友清之承を益
玄十月城を清と初めに秀元より玄もかりて善徳なり
凡日本此を朝鮮に何るも其十二万餘人の刑珍蔚山をせえ
つ為軍士を三服に右服を副也李如梅梅を將と馬歩一万
三子六拾人右服を副也玄李芳表解生を將して馬歩

一万一千六百七十人中服ハ副也云々策と相つて馬守一万
一千六百九十人其卯子控軍あり是は弱きん方城叔人ぬ
鉄炮一千式百四十四位火薬十一万八千五交鉄炮の火薬六万九千
七百四十九斤大小の鉛五百粒九万六千九百六十七斤ハ遼陽の
分守張登云云といふ者運之を備へ之服統鉄鑿^{テウシエレウセンシヨ}鉄鑿同棍
火炮火筒固牌^イ佛良機木の玄器をおとしくあり何つめりり
蔚山北營後槽門塚漸く出来て卯うまハ之の北ハ塚北子
いふと合さりりり敵方ハ城營法もかまハ三斗匠も亀城
せんたもあつハ軽くハ落海一備の全うぬ中ハ攻よとて
十二月十日大明の法將漢南勢五万人朝鮮云々相加り事
榮州ハ逐き蔚山ハ我向るハ以時突戸備後与海肥た京

あま太田能驛者おと蔚山ハハ丸と彦陽ハ陣りりり光つ
も此をわくうかひせりるに策維忠ハ勢五津んて存候の
云とうちとりあり浅野孝長ハものこたえを述べたふと見
なうら敵にあまて蔚山ハハは後北あまりり山ハハと
馬とすむ突戸太田ハ其志ち切なまとも大名ありかきり
うんとかきくともむ進ともけ時孝長二十二歳勇氣登の將
あれハあ將の謀をあるといふ白龍をいふ進む突戸
太田も見放りくともこれをむ大勢ハ孝長ハ小勢と三重
三重ハ困るに三將一子に奉て东西南北一里いてまハ保
え来必死の志あれハ討多進とも攻進ハ極勇を振ひ
うとも明勢多勢あれハ力のか保あり腕いり進て又

にたり去連とも三将士卒を勵一終に田を破已てかきり
の者追うけしに孝長婦とありし我く引退くしる三軍し
孝長婦とありし孤負しりし既し危りし一如に孝長
の部臣飛田大隅とありし我て敵の大將を討取し其時
たよみし連しりし日本の三將を漸く蔚山に引寄せたに
加藤清直の臣加藤清直といふを備一城のを圍逐く依く
淺野右田と蔚山へ入不完了の如きにありし隔りしと將と
この連して一如し蔚山へ入りしりし志と敵と追拂ひ
く是も跡より蔚山へ入にありし城の守護人加藤清直とい
城中をせめくり難事と捨りし淺野右田といふと守護
しありし毛利秀元軍兵を死んで蔚山とせしる大田の
軍とよりよき方をしりしんて其外我具を用意
しりしを待たしり

蔚山合戦付嶋山城責り

大田の將孝如梅楊登山は彦陽の合戦し日本の三將と
討りし中のよりみく多くしし世を急にありしと蔚山
を攻取し日本將と鹿臺せしやと多し拾万人二千ふ分侍
大田の孝如梅三万人ありし楊登山は十万人ありし
あるに時朝鮮の將把撃し軍擺賽しあるも女子騎し
城守下によせしめと世に我し城を足してのりし
しく打かあしし朝鮮の將把をみ余人も色めし立く
背とらめたてのうけよかくる城をとりし賢とを有勝人

つを穿突て出く戦ひに蜘蛛子とちりたふとくおけり
しり城を氣にのりて追討する如く明を四方よりあつまり
来り打圍むことともか福て明をれなきいぢ知れぬ城を
おち東へまくり西へせめ付ち南より右へ轉り百挺子練
一戦ひしよ明を崩さ立くにあはは城を此に屬くに
油の討死を計家に四百余人の死するも如き子余人
とくや又蔚山と鳴山との間に大河あり朝鮮の將李芳若
解生亦被河を舟をうく道隣より火をうけ燔に死して
蔚山へ入るとに城を是とあつて逆討にせせて急ふ
攻めしに李芳若若解生亦舟を渡らうとせしむ死
するも如き子百人たが芳若若解生亦舟を渡らうとせしむ死
をうく逆討にす時大時の大將麻貴芳國器の南將ハ
蔚山の城をせめぬ明を度々利を失ふ事といふりさ
ぬんうを合せ蔚山へせめよせておけ方の地梅一破柵を
やうこの地に入るとに淡野を長といふ戦をきて
突却防もとも明を大勢あはし入るこく出入
責我ふにこの地は昔は毛利輝元の臣冷泉氏の大輔
元光と中をり渠を築け其勇士に高毛利家の軍よはさ記け
の役をたう今度蔚山の城を築成終せしむに彼城を築
こく加勢はるよ来りて居りしり明をの大勢を出入と見く
ものものを右にたうこくあはしりて戦ひしり明をなく
おきしりともみくこのをとも手負成り討死して残がふにす

あるにせりり 阿高浪豊お寄す一所はあひまう 戦ひの漢南
搦切進とも不利跡よりひと討く 推くは民部太備は古刀
水車より一をむ敵と十回か人まゝなき此てより阿高浪も
太刀と捨て切くハ落しく 戦ひ冷泉も阿高浪も一処に討
死しありあ人の郎等主人くもてりハ誰か為に命を惜見
とて二十余人討死せし時白松若尾伊賀渡又高浪吉安
方郎等情亦は打落他所はあり多討死よも進しと知素
あくやあひらん冷泉の屍を細め二人ともは殉死しりり
去り討死しを冷泉の郎亦二十余人の姓名を記し冷泉の
郎介あ進ハか雲國毒獄清和寺に附寺領主位の位解を
立て彼苦境をとひとりやゆえ証さほひくも一ハ

輝元の家臣完戸備後高浪口高浪高浪是亦あ但此を亦三刀屋
曰高浪亦命と不惜防りり 高浪亦長士率ふ知して此記ま
あく神炮とくせ高を討あするはるとたりく川の子を打
たふとく記明をあ進ハあく高は一ツもありあり加高を高浪ハ
高浪亦長と傳りるは高ハ高を此親服ありいそき印高を
望めく進し高長高がて系年あして惣大将の案にあは
二の高あくもくもくんと 他は譲りて不利火死とちり
戦ふ明をの高麻貴茅國高もみくこの多く討死するを
見るに思ひは力をそ高を退し高をあくやあひらん
麻貴ハ大軍を率し高ハ高押しせれる此高と中ハ
高進高曲にしてよりくもくもくも利高元高人并に

明玄大少周章一遊人と記ふをきて切なきなり水も揮
取らば及んぬ心なきぬきとこれ海へ入るに死にけり
孫少之艘の毒氣も三方へ記さる遊りあり其外此毒氣
とも初の日とい義舞有るなり身は旗を足して中を明て
通るる清正大少武威を少い尉山へ入るなり城を懐
去氣十倍一よりなりあは大明此將揚務といふもの士卒
其小向く申あゆむみうる大軍を率しあら何まうけ城を
落してあさいそさ尉山へ下せて城をほりて清正も
ぬんとて二方より押あがり城を清正の毒氣を以て
膽氣社母成り明玄をよめ如に大明揚務のよくに城を
下し付とあのおろくあるま砲子て明玄を多くうら殺し

さきとも城一重も破りあは大明此將大將軍揚務
あに來りてけ城力責し落す一葉はあに水の手便なる
かんと上糧も走るかんと毒を一して糧れたるたらなる
城を忽落んといふ揚務むと同ふしてる毒より毒を
て柵をうら糧付せしむぬ用ひして日を送るけ城
あ走しく柵中ひそくに池水を汲け池水は死屍多く其
水顔血を混じりさきとも城を去りてのんて渴を助く糧も
又うらうの初れ目とい春紙が黄紙を食とせり或は牛馬を
あれらふ或は城をひそくにゆく大明玄此戦死乃
もの勝をさううてま川うのやき米牛の毒をゆきゆり
一日此仇をたすく清正けりさ海をえんく明玄誘んる

に使者も大明は大将楊瑞の方へを日本大明加藤清正
大明の大将楊瑞と戦ふを改るべし我軍名の眾ありて
死に候ふとあはせむおの故は楊瑞と親く對面し和事を
潤へし軍事をやめんと於中送りし楊瑞は大明は悦んで
清正力をて改を乞ふ物もゆるけしに清正もそく
て明帝へ献せしと評定して返事しけり日本大明
和事の事我日比中事あり連日對面し和議定しとて
使者も仰し楊瑞先づ此地へ移りし志ありに清正と
相しるに清正既よゆんとに改は孝長其りて制して
いづく城を出給ふあり也楊瑞の志を我軍の別中事
を生捕へし謀したとて此くやうが事ゆは作しりとも
を益ありとてし又我軍ありし信ありし某代りて可
系楊瑞も軍をいづく清正と見知りし孝長代りて
系んとしに清正を解退しけり此時清正の臣も
毛利の家將も一回は孝長に命言ふとて相合せし
かゝ清正の眼して使者楊瑞の方へを病と稱出さる
しかは楊瑞大よりの意は蔚山をせめ候とんと下知
しこれとも十二月の末ありしを氣に強く空く事を言し
りその後明の生よりに清正和議の事を問ふに楊瑞は
楊瑞は乃し相し我軍長を智を感しけり相慶出さる
し日本は將蔚山の難儀を救んとて正月朔日小西の長子
能を以て和を明天皇に奏して蔚山を救んとて毛利秀元

に使者も大明は大将楊瑞の方へを日本大明加藤清正
大明の大将楊瑞と戦ふを改るべし我軍名の眾ありて
死に候ふとあはせむおの故は楊瑞と親く對面し和事を
潤へし軍事をやめんと於中送りし楊瑞は大明は悦んで
清正力をて改を乞ふ物もゆるけしに清正もそく
て明帝へ献せしと評定して返事しけり日本大明
和事の事我日比中事あり連日對面し和議定しとて
使者も仰し楊瑞先づ此地へ移りし志ありに清正と
相しるに清正既よゆんとに改は孝長其りて制して
いづく城を出給ふあり也楊瑞の志を我軍の別中事
を生捕へし謀したとて此くやうが事ゆは作しりとも
を益ありとてし又我軍ありし信ありし某代りて可
系楊瑞も軍をいづく清正と見知りし孝長代りて
系んとしに清正を解退しけり此時清正の臣も
毛利の家將も一回は孝長に命言ふとて相合せし
かゝ清正の眼して使者楊瑞の方へを病と稱出さる
しかは楊瑞大よりの意は蔚山をせめ候とんと下知
しこれとも十二月の末ありしを氣に強く空く事を言し
りその後明の生よりに清正和議の事を問ふに楊瑞は
楊瑞は乃し相し我軍長を智を感しけり相慶出さる
し日本は將蔚山の難儀を救んとて正月朔日小西の長子
能を以て和を明天皇に奏して蔚山を救んとて毛利秀元

會中令吉秀林黑田甲斐吉川元就三人立花たを久留目
坂四郎秀包を惣三万七千余人蔚山の法接しりて其首
我部元親を始りて四國の去武万余人又蔚山法を意に
屯せり於合六万余人漢南嶺にむ向ふ中に先陣しりて
吉川元就亦を漢南嶺と戦ひ其勝て首を解討せりり
大明北大将楊蔭の蔚山の法接ありと申すて其意と謀し
て去を討めくきに極ありと述は四月三日北親先法不備
狼狽して小島去法城中に法接を是と志しりあり
去によりて追討ありりりり聖官の朝漸知て城を
法接の勢と一手に成て楊蔭を逃くする事と志す
亦是の明北大将英維忠茅國英二人の首命を不惜かざる
く苦戦し明を多く討てしり其意と法に被る
力戦せしなりと述しとも楊蔭の軍を去其意を道に去て
去を討めし其の踏込をありりありけし時よ楊蔭の汚名ひり
流布しり

大明魏統欽攻順天之中日本法將評定事

同文月朝鮮に風接しりりり去の四月楊蔭敗軍し其多く
討るるに其意ありりりり大明北親をこれに
恥すしりりりり大明を百万人を備へ順天を圍て日本法將
これありしにせんとする事しりりり沙法あり依之日本法將會
して評定あり皆一同よ大明の圍をうけてを悔し甲斐
ありん明を退き金山海へりて物多しりりりり加

大馬御中よりはいま、敵の旗をも足兵百万人といふに恐れ
て引ん事神に馳し、嘉明より、旗のありて、敵の旗を
其の海軍よりとり、不徳將も、嘉明を、持参し、すも、能成
許區に成、よける、蔚山、一字、え、う、毛利秀元、加藤
清正、安國寺、を使、て、順天、一、を、して、中、の、不、徳、將
順天、を、退、て、釜山海、の、事、は、先、秀、吉、を、在、て、後、よ、て
改、之、れ、と、中、送、り、小、西、加、藤、は、可、成、と、同、心、一、別、使、を
を、秀、吉、に、一、を、け、く、中、の、に、秀、吉、に、中、の、ひ、ち、よ、い、り
大、明、の、大、兵、來、り、の、事、も、あ、ん、る、城、を、去、て、忠、也
さ、く、し、き、や、能、城、地、を、見、く、望、く、者、り、大、軍、を、拒、と、い、し、も
是、を、あ、り、に、用、意、す、一、は、り、の、我、前、と、し、り、い、ひ、を、以、よ

何とん城を海や大明の去い、ま、順天、を、去、り、に、在、り、に
經、加、藤、清、正、小、西、加、藤、は、長、崎、は、弘、法、院、中、長、黒、田、長、政、鍋、崎
勝、茂、も、利、豊、も、筑、紫、義、冬、も、留、目、秀、包、も、二、方、余、人、の、旗、城、を
与、海、一、字、在、り、の、秀、家、合、右、秀、の、秋、毛、利、秀、元、長、曾、我、初、元、親
以、中、國、の、去、ち、ま、り、志、は、く、海、軍、一、て、九、月、子、卯、り、又、海、海
一、と、任、渡、さ、海、に、使、船、解、く、之、り、か、く、と、中、け、は、不、徳、將
あ、り、く、城、と、も、ち、り、あ、り、同、六、月、を、字、在、り、秀、家、合、右、秀、
秋、毛、利、秀、元、以下、日、中、一、海、り、り、物、を、に、秀、吉、に、は、軍、忠、乃
後、海、を、あ、り、且、又、蔚、山、を、救、り、時、の、生、岸、順、天、其、城、を、去、ん
と、不、時、の、去、海、其、甲、乙、と、を、結、く、紀、一、て、是、を、難、責、し、て
對、面、あ、り、け、り、を、後、毛、利、秀、元、を、得、事、軍、功、を、褒、賞、せ、し、る

又加茂嘉明の果年の武功と今夜明大と玄海とといひ
を海を獲多うして賜感状なり頃年日本は諸將朝鮮に
討取而北首とも日本へ送らんとせられし野茂事故に或は
鼻を切り或を身ととりて大成桶に入事京都へかく海
を桶の救賄てかうふ一うに流や鼻身若千し乗吉の
下知して活時大佛殿の邊に埋て号耳塚朝鮮人來貢
乃時を塚の邊にありぬふ文と誦事吊て哭泣して云
軍朝鮮に死して身鼻日本の去に埋と號しとや同七月
は大明の將劉綎水源といふ知よ屯し順天を攻んとせしり
先づ小西行長を殺て和賸の事といひ送事加茂信正が謀
を以事始ふ故に此事不成大明の玄朝鮮は元満を劉綎

使を行長方へ寄し中りるは兩國の玄はくしりし又これ不便
なり行長と劉綎お逢く盟約し是は軍を班しなはるは北
大をふらんと志ありに和を乞小西初の程をうしりし
之詞移ん此中へ劉綎一人出く行長を連んと申裁故し行長
同心して時日を約し其地を極て移んとし劉綎陣中に
日本人有るは順天を去りて是信正謀あり行長去りし
力十餘人にて生捕て明帝へ献せんと此事を告く行長
聞事劉綎と對面せしめて其術淺智なる事を知ひし
細しめりり劉綎を約束の地へかりり空しくゆふは時大
明は監軍 日本に不
目付あり陣效といふは劉綎に向ひて謀の拙くして
泄れ易き事なりしを以て事あるに劉綎も深く愧みしり八月

上向大町の大将麻貴といふもの郎貴牛伯英も此次將と平して
温井の陣へ蔚山を攻んと向しう其法向ありし海軍
も是又いふ所の法大将の敗軍にありて攻る此法向も大勢
といふ多しう戦ひしありし合て對陣也又鴻津義弘法城と
築くかゝくも亦如く大町申路の大町董一元といふ若大軍
に事被城し一とせ向ひ軍の神と試しうとも鴻津の驍勇
に恐れて城を不攻を陣して日をさうあり

盛衰通紀卷第四十二

目録

秀吉の并政而醜鬪を見し事

蒲生秀均知行没収事

秀吉の不利法を記法文不和大名中事し事

伏見騒動秀吉の遺言之事

秀吉の薨御石田増田も密謀し事

石田三成侯を死し事

大相董一元と鴻津泗川合戦し事

日平勢朝解より班軍小西弘軍し事

秀吉の大阪後御を奉行し 徳川殿に使を立し事

夜打評定付和平并記請文

御川殿伏見館分向臨比徳院申并矣見

堀尾忠家 家康公向移後の事

家康公利永宅入河石田推察

之

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

盛衰通記卷第四十二

秀吉の政所醍醐花見の事

古は唐太宗帝羅煖煖葉賜功臣李勣といひ我々群臣比勞を
慰んとして朝鮮陣の京中廣長二年此去二月十八日醍醐の花見
仰むる所頃日堀久太郎秀治誠後と稱う入國中秀治若軍旅
一旗堀監物並政を為して誠後の後見と合せし時又監物
次男堀丹後守並家又監物見雅而助う仕立しりぬ事を
秀吉の申して誠後一掃する所跡事出来せん人
何やゆめり

二月十八日大津守相系極言の福徳在為家又正則増田右衛尉
長盛の三人醍醐堀う角の介まよりを存り先中江式部

山中山城守ハ惣攝の中此無用のも此を禁部不役なり
秀吉ハ此山の廳礎礎一逐ま一番政所涉即そ一の政小お
掃磨田中玄部少備二番西丸腰之一本下因防石川掃部助
三番松の丸腰あり一打本河内石田本工段四番三の丸腰之
平塚因備田和泉与五番加賀辰是は前田利家此息女秀吉
ハの妻しこ一河原長右衛門吉田豊後与六番東北此方是ハ
利家此女中なり三宝院一入給ふ法腰係從者ホを夕陽に及ハ
て糸とて海邊通りり道のた女色此ん此の幕を張り
秀吉ハ秀頼ハを携へ此の政所已下い川邊もあけ女中
斗の事茶屋をもあし一庵中みなく妻女を以ててい
せり増田右衛門茶屋ハ石橋の邊よりあり

聞説醍醐花世界 見来此處雪乾坤 出供の庵の中

天の下残ぬ花の盛よい山より山や風おぬらん 何る女房

和使度橋首ハ通務来親掃部清花法住より使を
酒肴と試見新庄雜舟茶屋も何の中より小川去佐
茶店者之間ハ式指言にむくしゆくにかや著に依り
又九人四方の辻堂此おとくにあり茶屋を志川らハ中よ
茶具をそる一茶湯の補とせしものすを殊に勝れり
長谷川宗仁ハ命して傀儡人をそる無せらる浴室も
或は小舟とて之を本此言に珍をうけてるをとおと
か一町屋を修り多しなることとあり或はたしひもて
相談を多し秀頼ハとなくさむおれ増田茶屋なりこの

書院より義之子昂り墨跡和筆に在古の三蹟の所書山居り
硯なと垂り秀吉のちより人々徳信院より茶屋を來り
茶屋よりありあふ長束の書食膳を山牧幼を請り茶店と
有り又新店東玉り茶屋よりは實風をなす一かあり一
なと用名一振りの物すまひある神もく物さひを系
弟屋あり多十六七此女房二三人秀吉の神よりありて
賣物此代を乞ふ甚無有りたりを後秀吉の若者皆及
女中と共に苗屋より上りんとりあふに天忽ち變り暴雨
あふりにあり山徑のりて女中あつといつりそのは津連
多る計を今よりありとやを後中將秀頼より報せ百枚
衣服十よりある之宝院へ賜り山此政所より書細百貫精茶
二子也を賜り秀吉のち之宝院へ居知とよりあく後約
なる事とらんかひ朝より六百石を奉附とる所を所前
日此三ヶ村幼修寺村笠取村小村木なり又秋の紅葉を
見たりんと約束あり

蒲生秀行知事没収事

奥羽會津蒲生氏口文禄年中死去し其子孫子代を
父の軍功大なるにより百万石をあり元服して蒲生茂宗
秀行と名系 徳川家康のむこと成る威勢盛なりけ
秀行の母氏口織田信長の息女より其女は伊之あり
秀吉のむけ人を娶よせんとみひく蒲生家臣の方へ
祈んありよ中をく大坂(むら)んとし後母養取門かく

信よ志さるりいさりしる秀吉の心大よいなり母の上流あり
秀切の志願を没収せんと申送るる家臣は母をいさめ
おれい母を何の返すもゆく息は元なり後より秀吉の
いより事金伴百方石を没収して下野國宇都宮にて捨八万
石と与ふ所計時家中大為共大は浪人しりり申中田丸
中務少輔園長門吉依久留備前守同大膳本村孫市志秀の
園白秀次へ百おさ進しういく程なく秀次豊吉の後園も門
依久留備前大膳おと親系ものお真ひ浪人して流浪し
りりり 家康の心百お進し秀吉の心二成にりり秀吉の
宇都宮より家人を誘懐ししけぬく笠岡城に備生源は馬
二万石志島城町押したる八千石河津城備生は文六千石知と
をさりは志島源は秀吉を救馬二人して河津を 家康の心
津物志なり慶長二年四月九日石田三成ひそかに備生の方
三成と親しみ後より存懐し仰りまふ様よりりり中成んと
いひかくは家臣は 家康の心申をさハ汝おらんまうせと
任又利家より尋しり利家と三成を不和おける得んを成
して無用といひお石田に与力せりりり金伴百方石の
不い上杉京勝よりりり

蒲生家滅地の沙汰は素朴しくあり大園の心を福は
またし一説は蒲生四郎を志す事し付て故三郎秀切
の氣を滅地せしといふ説實説なりりりり末世ともた
乃首無のゆりりに記するを印意成りりりり考

秀吉の不例詔將記清文不和大名中興の事

慶長三年四月廿日秀吉の病よが是まふと此秀吉の教を
糸の法式を出さし申す大名諸中嫁娶の事ハ私に
らひ此二事好に違て事を謹細とて傳出さし事あり
三事好とい生約中村堀尾たり小年事ともいつり又天下此
大小事ハ夫人の大老徳川加賀毛利宇都多上杉本沙法此
一とてしけ夫人を秀頼の境見とて大事の政事ハ紙
頼より是ハ秀吉の生害の故よりめ試也然るに頃年ハ上杉
京務涉服と獨り奇奥別一たり一故京務の代りて大將
少將伊達正宗夫人此中一加らる又江戸中納言秀忠は此ハ
秀頼の清親極分と定め城中掌お利勝肥後守利長後政利務と此傳と

定めしはみまはり増田石田大谷淺井長米所司代ハ徳義院
玄明しけみまはり所司代三奉行ハ大老夫人の命を法て
沙法せしと定め候又中村或部一氏山内對馬守一豊生約
雅和助之人を何あし法將法士と事あり人を以、
双方ハ立まうれ事如賸と調ふ一物此ハ士の習ひはよ
幼思せぬものも何多くあれハその為よハ武道の外も
忠義と事と一事をいへく幼思し是る為よ恭長老安國
奇學校を加へらる依て人々は二六時中大名法士此
中よ事ありたすやと考へ巡見しける候に世人是を
身圍れ候といり同五月十六日大名旗本法士乃て此三
の記清文を書せらる秀頼ハ不忠二心あり候事

この事し血判より頭頂此血を用ひ秀頼に一通秀吉に
豊玄の落し届討一通又一通は向この事前より重く二六時申
披見せよとの事し又徳川殿の御文を秀吉に豊津ありは
棺の中へ入よとの事しり述よりい詠くわみを経る六月
十四日の卯時不例の増田石田長束淡井徳吉院をより
増田いえ東武百石をより大和郡山貳拾五万石石田いえ吉と
いひ事三百石をより江別佐和山貳拾万石を領し長束いれめ
百五拾石成り江別水口めく五万石をより淡井も徳吉院と
いひく小為こり甲別守護より徳吉院も小為なりりり
丹波越山五万石を領しみふ秀吉に厚恩の者ともゆ
天下の礼を人此不和あり記され申のうらぬ徳吉院と

今度意度和平致させよとの事し畏て承るや見え
とも人々水引せは依り秀吉に家康の事をりて右に執
乃あふ家康をうけりい給ひあし清取ありてまなく
と百てむと一は忠義のつことい信られくゆん身依り
殿中へ大名を召集め茶酒高敷別よりなふ挨拶人に
中村生駒山内泰吉光学校安國寺六人の中にも中村中
りり清吉のよりい位階次第統よりんと申されは水引
わく札酒よまき大名言歌の福なくふり臨取酒よりよ
成り家康も清かあり事大ようれ家氣色に事
家康とのいし和平のよりかく無禮の神を秀吉にをい
りりあふ又家康をあきらり給ふより八幡七せり

らんあま 我等切腹して侍中さんと刀よきとけ給ひ
しを淺井中村徳右衛門をさしなりしに威勢物ふふに
んと名怖し事先より壺の形身改り事大小名も快く事
海へおめ入る退かす秀吉の聞ひて十六日よ
家康の口を括さきのみ後此物まい三徳を道て古今
の名將も秀吉死して後秀頼の政道を補佐し給ひ
しとてお行の源を流し給ひあり 家康の口も流
し給ひあり

伏見騷動秀吉の遺言

六月十六日戌の下刻より何といなく伏見騷動に四月廿日
大岡伏見より座敷よりいづれ謀叛人ありと不審にふに

に云と集めて家人の主の座敷へもせり東西南北の
にさしきしり忽よあつまりたり又七月十六日件のあし
伏見中騷動中軍士は馬とせめくをせり町人の家
をのろふとけりし 家康の口内家人井伊玄就
柳原成邦お多中書水野和泉の若れ若れ居たりが
井伊をくをせり 家康の口 秀忠の口 陣子の館を
是よりお多内記いまこ十五歳の時 童名 清およて馬乃
をあれ事さいさしと下部ともやゆと中あまいやくな
者へしと事お多行目付拾餘人ありしれ誰の御し
よりの騷動よやそ中根を尋させらる時よ今取まの別
石田治部大進修理の御殿へ武器馬を括さるに

大名小名俄よさつとゆふ一中と系 家康の聞きて何の
津接持もあくたも何事一とのに任られしははらく
して志のうよぬみりり八月十日朝小幡慶吉改行相
東市正盛出を大岡の涉るへてひそくに原あまを
秀吉末期に及びく細身の秀頼を補佐する人を見る
に是人もか一徳也い天下他人へ譲らん徳也とも天下の
改道を徳川を頼む一そま細を我朝鮮を攻め一生
の阿やまうし徳也ハ十年なるは大略をいさか一人
我死をハ朝鮮記らんその時母志川む一そ大將ハ家康
志くれハ日本の死をゆさんそ口惜しその為去 徳川成
應一末くハ人へ心服して 徳川へ志うふ一志う徳也が

日中たをちぬハ一か一故ハ 徳川版を頼金の言ゆふ
かあはく不審すくうはとの徳也あり

其翌日十六日秀吉の任して徳儀大吏を百て目見
中討つる秀頼の事頼多し涉置面とちう退か

あり是を大名のうきにち申く今のていぬく慶死ハあり
我ううぬ和の体を出説せんとの事ありんと控中り

十七日の夕母ハ 徳川版田并みを召多浅野石田ホハ
たうやうに筑紫まつり朝鮮を陣の人とをわねハ取せよ
美川取かしくハ 徳川版お田あうけうりて十方の軍兵共を
卯云此枯骨とせさゆやうにえうしひし一

又秀吉のハ 家康ハ一作らるハ秀頼十五歳まう足下を

伏見を城し江戸首門秀忠結城守り秀康とい秀頼り
境見しそりし流く流るる下 徳川殿に常に警を好ま

るれいそ心み任せらばよ政所の事い伏見よ重忠いし世渡
とは大坂よ重政道ちおなりの者我等在世のふく河治

一 徳川殿に代そりし流るる下と也

秀吉の薨御石田増田も各謀るる

同十八日大岡伏見城よ薨せし流るる時六十三歳之東山よ

葬るる云以一人信を此秀頼以時七歳中將殿とやらり 一後一
長末

借手といり け砌石田三成ハ増田を閑知一拒き 徳川前田の合せ

孫頼やあさんいりえらりんといふ増田守てあ人もあま

浦一上松伊達毛利等甚多合を秀秋波草中細を請津御

おも大石といり石田曰在母河は 徳川を人子極也

毛利を天下母皇か一是を世代傳いふ人い彼一族秀元ハ

武勇あまとも小勇し又字を多と金吾秀秋といふは

ゆりくとして自立のふか一利徳を好て勇士誠意む志

あ一朝鮮の時もけも將ハ功か一波草首の志願病人なり

力おかりよ家人ハ首余人いし浦を割て今秀吉ハ乃

幕下に成て心儀あむ人し 請津伊達ハ勇も知も何り

細忠とも天下とのむ氣あ一人は随ハ力を立流やうら

たりお田利家ハ知勇ありて大勇あまとも即ち天下よ

うけて義をあらる人ありし案田合の時志津うけ

いくさに秀吉つうら 勝利家の家ハ入給ふ此の時利家ハ

柴田一味成す所の時秀吉を殺して天下を平氣なく
即て養應せり是を以事知す一ふゆきさハ 徳川あり
長久手此役以後秀吉とふはありしに秀吉とさゆく
和卓ともひまの妹を妻に遣し清母儀大廳を質として
和卓一終ふ計大勇天下にありいとふ増田守て
徳川前田ハむいす一あまの申をいふあまはり事を
あて根の難説といひせば利敵ありは本國へゆらん
時よハ徳川の大將ハ 徳川向らん 家康の云加別ハ
此ハ比利敵に密通一心を合せあ後よりいふとみ討ハ
たやゆきさゆきとさといふ一あ田云ハ大野修理奉る
件の次第を語すハ云云中ハいやく石田増田のう筒心
かこ一今の徳川中しくその事にいふゆき一あまの申ハ
中よりして 徳川と別心をさしていふとよりゆきと成る
徳川へ取入長盛ハ利敵へ取入あまの申にさ方兵我々縁を
もとのめて 徳川の政道よりぬ事を前田と知す一かよりゆき
自物と 徳川を人共恨むさや一はかしてさ後ハ愛を
ゆきと一といハ皆一同よむとやなり石田ハあまの
中も大岩と淺井ハ 徳川へあまの申ハ必秘死しと
中て退か一あり

是ハ秀吉ハ此處清とはゆきかきせ一あ知人か一淺井
長政も 家康ハ一人をさし秀吉のあまの申今日ハ此處を
あまの申ハ中へ送る 家康ハあまの申のあまの申あまの申

とく途中より駿馬の士より下りて踏踏此石田の家人
八十嶋女を馬と申すもの一封の書を若くは清説あふよ
昨十八日言方にも秀吉の書に依りては
と申す所必出被る語を海と自心と群一中送る女は馬
をハリ一多途中より出歸り井伊本多柳原を居る事
ひそくに大関の死を石田より平成身にくるはる事
ふ思波清神の日比熱意にく口上のお達りも必く
油の申す事と信出と依りて後秀忠はと清説法志系人
あし申す事も秀忠は昨日の朝此方の出病氣として係り
依りて清説は星野へ下りて候ふ

頃日面より親御へ交りて先加賀大綱をむつまうり

一黒田甲斐守孝吉入彦如水初殿を依りて言虎細川
越中守忠貞輝元が所領守家政清神は京右史守長此所
日比中絶との加賀守計清説は加賀左馬助嘉明は二人
未だ鮮よ在陣也

又石田三成を荷擔の大石の安藝守の輝元守長守家上校
京橋佐竹義重合吉若門秀秋忠誠相馬の守長守邦朝
鮮在陣の中嶋は玄庫守松立記左守宗茂小西柳津
守綱守加賀守おたり

家康は親むもの福嶋正則池田輝政蒲生秀行伊達
正宗赤松を毛利左衛門守邦班といかき奉り

石田の徳管院の言に依りて家康は審事を告あ又

さひしらひ見あせともゆりなさに今を一向
自らの心丹成りあり

石田徳信を後事

九月九日重陽の爲れお仕の時石田と家康と行合に
其旨をいひよふに成る興ありありて折書小るありに
長柄の傘をけりてあさせ志ありて杖本履をき目礼して
通りけりてまりて無禮は是徳川の槍を棄てん爲かて
やけりて後石田を我敵へゆり祝言に來ふ大名も進ひ
るるに風氣たるとして上下い若くあら廣神の夜若哉
そよよ若羽織も帽子にくちをつみ對面せり人々
牙をうめとも我一人ありぬい力なく悔りり大名志ありは

石田の無禮を許さ家康公を重てり管阿多しとて
人々を悔さむば多依渡守に依渡はる正信中りて是實ハ
君の威をくくん爲るに己人よ是れ来る故よさひ付
大名形一是君代は爲よ言事し必とてめは海一これ其
かまよとす大名多し毛利守多多の金吾改卓黄門佐行
上杉鴻津立花小西岩城相馬秀元利頼鴻元並切かまら方人
なまはたやしく殊罰ぬるかん必とてめは海一これ其
家康公を大名とあこめさひりり石田よ志のこめとも
折書おまひりとやう中りてさよも若て出同人は色おき
石田傳へて不思議はさひをありり同十六日石田
下知して徳大名の屋敷くとおとく入替せりり是ハ

徳川版のを不^レ己^レの徳意の者を入^レ留^レると也是より高
く隠^レ係と^レし^レ津^レ推^レを^レ何^レり^レと^レや

大町董一元と鴉津泗川合戦事

朝鮮を陣の流中^レハ秀吉公の薨^レ去^レハ^レ日^レ和^レ合^レ戦^レ
たりけり九月中旬大明の茅國憲大軍に^レ泗^レ川^レを^レ渡^レり^レ
日本惣領城より^レお^レて^レ戦^レひ^レ望^レ城^レより^レ出^レ軍^レお^レ其^レて^レ日本^レ坊^レ
先^レ出^レと^レ消^レん^レと^レせ^レと^レ茅^レ國^レ憲^レ意^レより^レ攻^レり^レ時^レ大^レ町^レ此^レ大^レ將^レ
董一元といふ者^レけ^レ時^レを^レ見^レ合^レ多^レ永^レ春^レ城^レと^レ責^レ破^レり^レを^レ里^レを^レ
犯^レす^レ後^レ董一元鴉津^レ倉^レ庫^レ江^レと^レ戦^レんと^レ進^レむ^レ鴉^レ津^レ敵^レの^レ大^レ勢^レ
を^レ見^レ事^レため^レひ^レ待^レり^レあり^レに^レ董一元陣を^レ引^レく^レ同十八日^レ此^レ
夜半^レ泗川^レ城を^レ破^レれ^レ攻^レむ^レけ^レ城^レより^レ鴉^レ津^レ軍^レを^レ僅^レ三百^レ余人^レ

お^レも^レれ^レる^レ明^レ朝^レの^レ季^レ寧^レとい^レふ^レもの^レ先^レ陣^レして^レ討^レ殺^レす^レ後^レ董一元は^レ
戦^レ事^レ又^レ泗川^レへ^レゆ^レ系^レと^レ後^レ董一元を^レ茅^レ國^レ憲^レ葉^レ邦^レ第^レ彭^レ信^レ古^レ
之^レ將^レと^レゆ^レ孫^レき^レ新^レ寨^レを^レ攻^レせ^レり^レ十月朔^レ日^レ城^レを^レ到^レり^レた^レ
戦^レふ^レ鴉^レ津^レ忠^レ恒^レ彭^レ信^レ古^レと^レ子^レ余^レを^レと^レき^レり^レた^レく^レ王^レの^レ兵^レを^レ檢^レ査^レ人^レ
にあ^レま^レり^レ茅^レ國^レ憲^レと^レ葉^レ邦^レ第^レを^レ方^レ人^レめ^レく^レ義^レ弘^レと^レ戦^レて^レ
敗^レ少^レき^レ以^レ時^レ中^レ軍^レの^レ大^レ將^レ徐^レ世^レ郷^レ望^レ津^レより^レ生^レ捕^レせ^レく^レ殺^レさ^レる^レ
以^レ時^レ明^レ兵^レ此^レ討^レ死^レ三^レ万^レ余人^レの^レ首^レを^レ大^レ樽^レに^レり^レて^レ日本^レへ^レ
寄^レり^レり^レぬ^レと^レも^レと^レろ^レと^レ打^レあ^レて^レ今^レ度^レ石^レ曼^レ子^レの^レ威^レ
畏^レく^レと^レ中^レ軍^レと^レ也^レ石^レ曼^レ子^レは^レ大明^レの^レ音^レより^レ日本^レ此^レ鴉^レ津^レを^レ
呼^レて^レ石^レ曼^レ子^レとい^レひ^レり^レと^レや

日本惣領朝鮮より軍を班^レす^レ小西^レ和^レ軍^レの^レ事^レ

家康は浅井石田二人を百多大岡に遣滅なせし二人は
いかに筑波第一の多朝鮮を陣の軍士と日本へ引こし
終るべしと伴ある人れく伏見とあり十一月下旬たうこ
浦より使を朝鮮へき大岡豊治を告げ皆く帰朝乃
事を催るべき多鄭國安といふもの聞付く大明の將は先
うんと計るは津浦より勇に名をこしをむせとあり
家康は
重て板堂より虎を筑波へきいづと味方の利何あや吾や
と聞るは時多津浦より晴いづと故日本勢引取安うんと津浦
中より別板堂より津進先内進在り勢も日本勢とあり討んと
陣隣といふものも水谷の將とて陸をみよ水谷の子あり
かり又陣隣鄧子純遊騎馬文煥李金張良相といふ大将に

を方の子人を付て数百艘をと、乃其舟を進め先法を全羅を
慶尚道に之乃の海口は屯して討んと先是をば知り加茂
清正と蔚山を去くか小西行長は順天よりか津浦弘川
と出く陶範せんときく津浦をさ起し陶の去る小西行長
の進るる鼓金といふ所より去り戦ひつるに津より強きの船を
来り小西を去る攻戦ふ小西自力戦して終り切ぬけ加徳と
いふ所より津浦といふ所より陶の軍といふ所の進ひ
来るる津浦小西と戦ふ陶の軍討死し是より後を去るは
あり又家康より徳永法京赤昌官城長江而豊盛木茂
朝鮮へ遣し法將の軍とくこ進りり加茂清正小西行長津浦
義弘鶴崎と浅野孝長木對馬へ引り浅井石田治部

徳將と侍うけしり

以時より石田一対し秀頼公に清目見しり一國に侍り
本年上洛して茶會中とんと以時清正ハ三成と申敷
ゆへ清正朝鮮よ屯する事七年立てし粟科一積
走し案も酒もかきひえうめを以時徳將をもてなさんと
いり石田乞をにくみりて向答はせたりなり

徳將伏見へ到り秀頼公へ謁し徳川後へ對面せしり清津
泗川の功を感し多し四方石を加恩ししり

十月十六日上松京勝上洛す秀吉公此慶法を聞る所也

秀頼公大坂渡清すを以時 徳川後へ使と立ちしり

慶長四年四月十日秀頼公伏見御駕大坂へ渡りしり

以下借を以 徳川後も是り多し其夜行相負澄り御よ
止宿せらるる十二日伏見へ侍り多し物方より急に侍馬とてや
めり侍申の別伏見へ若狭へり同十九日有馬法正宅へ入る所
井伊直政より密談ありて席を立て清侍ありて一在堂
言虎より密談法正知事人か一回廿一日前田並み侍り
より使以時生約雅楽と
完名老あり忠輝新臣と政宗との婚約の事を
攻め問ふ 家康公も政宗も宗薫も先にお方の
社ありし可もみぬ返り
しげの御事をめてふし極る一何と好くみ侍り
徳川家不仕と相見えしりある事一志をかよひ大石好侍
あり大石刑部も 徳川後へ使と以時一味の事申上り
以時徳川後も柳生但馬守宗嚴カンの子又右衛門宗矩を以て

汝を鳴らすと逃去る事ハ以て石田と力ホ一戦此志あり
吾を撃つて悔ふ一と任あり又右馬助事名を記述して
當時騷動何事や又右不敵の人あり事記を記述しや
といひあはれをゆきて當時を明智松永おとさく人あり
何の事あるんといひしに由りし中かると中よりし節
中よりし信を 徳川後地地方此勘定所並に守人官代官在
右建れしと 作を記す 昨日 徳川後地代官ハ伊奈總就大久保十之助
長谷川七右馬助ありと
今度同道して上より浅井彈正と浅井通の事とゆきて
浅井より一城より彈正を回して 徳川後一城あり
堀尾と浅野と物語の中に利家より堀尾より事ゆきて
よりしに彈正よりしにうんありその法を石田ハ川を

案と細川越中書とを同所より拓き 徳川後とてトに記す
前田を亡くしあはれ家の米地十は余も人々に配分せんと
中せししに上より徳川後と前田と和年一終といひあはれ
利家の事にて我輩と 徳川と志しつけしを石田極く中に
よりしに成りしを家の中よりし 徳川と和年せん事
新ふ所也と中よりしと明る浅野大よかんよりしと云

夜討評定付和贖兼記述文事

同日朝日石田方此大名會して 家康の宅へ和討せんと
後より前田玄以よりしに謀めてし評定山よりし依りし玄以
よりしに双方和贖との一事記述文を記かりしあり事云
四年二月五日の日付和文なり 長束石田増田浅井玄以輝元

系勝秀家利家おし徳川内大臣候と書り 家康は
も右の意中一又同一多祢文あり

徳川殿伏見館より向橋へ徳家事并異見事

云以ち堀尾と相違して其後よ去れ相討の事いり也か
中延より其述ハ秀頼公の由為と稱し多石田より其威を立
あれは不慮一切はさしひり相も小西より其威心は
今 家康の宅を演習なり伏見の館より向橋へは
うて相討と存子を慮りしは徳川といふ堀尾聞さる
利家一相相違は利家も我子利勝の事と云ひ
徳川殿と同くして七人此大石を呼あけり
法して同廿九日よ大坂と立て 家康の伏見の館
加藤細川浅井
徳川が家康黒田

まゝ家清正忠具お返す 家康は小舟より途よ涉あり
加藤浅井細川を利家のかこ服よあさりり 利家の胸腹若く
まゝいり候中か 配膳を皆長えう酒を若し 家康公は涉
お律儀なりり 加藤細川浅野を由次よて餐食あり 利家信
神若信濃守を石田より涉置は下りり 利家すめて向橋へ
いづり候と申さる 家康は清田より利家中はる
堀尾忠人の事並云以ち石田とうとむる事今ハ云以ち
城番の以ちあれは向橋へ移らせ候と申さる
家康はも涉程なりり 利家の家ハ涉越ありと仰おけり
石田を聞けり候に難説をいせりるを利家たえり
徳川殿を招く力士浅井事討人と計るもいせ又詔は

大名より打取んと巧むと登いさせりる 依く清足金也あふ
中より大名よりしはふ中にも十数部の由屋敷へ入る内徒
中にも此の福徳黒田池田友堂汁也表右を定む其席へ
出ぬとも毎夜系りはとめりり席下の色障子けし拵て
世に伝うかひりり清正表明孝長忠具おも毎日系り
あはしとも由福心やまげん表よて清對面あり由容儀も
有しうとも巨細を知る人あり其後ハ由形よてこなく
まいり人を付まうかひりり表汁始終りり清正とめ
あつとうやけ時の事ハか多正信の志也りとうや大名
系りて極々に中せとも 徳川殿を清許容をさし系り
て中大名の中おも石田方のとの多也いとくあはしぬ
清接様のこ成りり

堀尾忠義 家康の向清移徳し事

堀尾へ清摺寄て下と有しうハ甚く辞退する所傳と
して井伊直政松玄紙をとのへ己来子孫まゝ清如在
あり家との神文なり二月朔日の事也

二月朔日伏見館より向清へ由りし傳ハ石田以下豊後
橋本くか事由加多を中入ふ 家康口も系輿をとめ事
由舎新あり

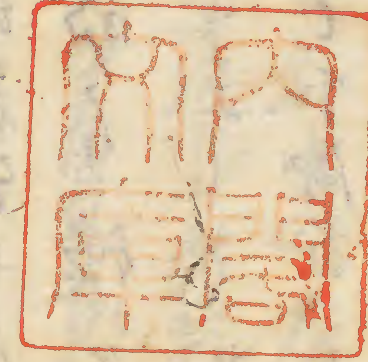
大名を癒病取目志あゝ後ち容書ハ秋筆にも中付
かゝて大名の甥の傳姓玄といふ坊主を習にせし
容るりの書まかせりりとうや

家康の利家の宅へ入清石田推系の事

家康の清入身之度まゝ延一事を利家恨くかとも
徳川殿を難儀のまぢく成る延引者より利家病氣
大切ありと聞きて二月十日は大坂へ越えふ中へ石田
重入給ひ事ある家康の大名まじりばふ中へ石田
庵にて川を名へ案内なく津波一通り一禮一秀程へ
清対面物多しと云 徳川殿は度々利家病氣の足色
多れに重てし城の中へとなり石田別働隊今宵も小西
親討せんといひりとも又評談山より今夜 徳川殿は
飯堂の敷に四宿あり是も大勢ありまれり け時浅井
徳山みま清を召建く利家より親ひまゝ秀勝へ如をま

向き誓紙を給ひまゝと云ふ伏見より下との事也
再程中あまはふまゝ志してあつて押て被る非文不可
と何ふ故 徳川殿は川よりいあふまゝと云く淺井も徳山を
向へりり石田方へも大勢ありて是非親討せんと
小あまゝ人男をもあまゝと云う故也して親を助り 徳川殿の
志のひれも此石田方へはあありりり向けて中へしと云かや
翌十二日伏見へ向り候ふ是より候は向橋と下宿敷とあ方
に清指書なりりり

徳川殿を石田利家亭へ参りし智阿の素舎の
人をあてていをうかふ事をほめ給へり



Faint vertical text in seal script (kuzushiji) on the right page, possibly bleed-through from the reverse side. The text is mostly illegible due to fading.

5

